

# 耳が聞こえないお母さんと私

宮ノ陣小学校 六年

私のお母さんは、耳が聞こえません。小さいころから、お母さんとは声で会話するのではなく、口の動きや手ぶり、顔の表情などで気持ちを伝え合ってきました。私にとってはそれが当たり前で、あまり不便だと思ったことはありませんでした。

けれど、大きくなるにつれて、まわりの人とのちがいに気づくようになりました。たとえば、電話が鳴ってもお母さんは出られません。私がいなるとき、宅配便の人が来ても声が聞こえないから気がつきません。外では、知らない人に話しかけられても、うまく返事ができないことがあります。

ある日、学校の友だちに「なんでお母さん、話しかけても無視するの？」と言われました。私はすぐに「お母さんは耳が聞こえないんだよ。」と言いました。でも、その友だちは少しびっくりした顔をして、「ああ、そう。」と言

いました。そのとき、私は少しモヤモヤした気持ちになりました。

たしかにお母さんは耳が聞こえないことで苦労することがあります。でも、私は「かわいそう」だとは思いません。お母さんはとても明るくて、私の話を一生懸命に聞いてくれます。声ではなくても、ちゃんと気持ちは伝わるし、私もお母さんの気持ちを理解することが出来ます。お母さんは耳が聞こえないけれど、それ以外は私と同じ、ふつうの人です。ごはんを作ったり、おそうじをしたり、学校の行事にもできるだけ来てくれます。耳が聞こえないことは、お母さんの「ちがい」であって、それは「悪いこと」でも「かわいそうなこと」でもない、私は思います。

私が入権について学んだとき、「どんな人にもうまれながらにして大切にされる権利がある」と聞きました。どこで生まれた人も、どんな体の人でも、みんな同じように大切にされるべきだということです。お母さんも、耳が聞こえないという「ちがい」はあるけれど、それは

その人らしさであって、その人を決めつけたり  
さげすんだりする理由にはなりません。

これから私は、もしまわりに耳が聞こえない  
人や、話すのがにがてな人がいたら、自分から  
やさしく声をかけたいです。そして、「ちがひ  
があることは、わるいことじゃない。」

と伝えられる人になりたいと思います。

お母さんと毎日をすごす中で、私は人とのち  
がひを受け入れることの大切さを学びました。  
これからも、みんなが相手の立場に立って考え  
られるように、障害者への理解を進めていって  
ほしいです。